

# あれ?これかあ



ICHIKAWA LIBRARY

参考業務月報

2022年11月号

発行：市川市中央図書館 編集：レファレンスカウンター 〒272-0015 市川市鬼高1-1-4 TEL. 047-320-3346

	INF	REF	こども	電話	メール	中央計	行徳	BM	南行	信篤	平田	駅南	全館計
11月	731	428	391	2	6	1,558	1,500	79	158	174	119	437	4,025
累計	5,176	3,647	3,416	69	58	12,366	12,087	452	1,540	1,146	969	4,233	32,793

INF:インフォメーション・カウンタ REF:レファレンス・カウンタ BM:自動車図書館

## 🔍 今月のレファレンス記録票から

分類	質問と内容
----	-------

I/V8 市川競馬場（現・大洲防災公園 昭和6年～14年）で行われていた競走（<sup>けいがそく</sup>繫駕速歩競走、騎乗速歩競走等）について知りたい。またレースプログラムや当時の状況があれば知りたい（レファレンス協同データベースにある事例「市川市内に競馬場があったと耳にした。いつ頃、どこにあったか知りたい。」  
[https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref\\_view&lsm=1&kwup=%E5%B8%82%E5%B7%9D%E7%AB%B6%E9%A6%AC&kwbt=%E5%B8%82%E5%B7%9D%E7%AB%B6%E9%A6%AC&mcmd=25&mcup=25&mcbt=25&st=score&asc=desc&oldmc=25&oldst=score&oldasc=desc&id=1000151907](https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&lsm=1&kwup=%E5%B8%82%E5%B7%9D%E7%AB%B6%E9%A6%AC&kwbt=%E5%B8%82%E5%B7%9D%E7%AB%B6%E9%A6%AC&mcmd=25&mcup=25&mcbt=25&st=score&asc=desc&oldmc=25&oldst=score&oldasc=desc&id=1000151907)（2023.2.17 確認）については既に確認済）

『いちかわ 平成元年十一月号』（エピック 1989）p.60-61「私語瑣談（5）市川競馬盛衰記」に、開設のいきさつ、開催の状況、廃止への動きと幕切れなどが書かれている。「（昭和6年）12月18日から3日間、第1回市川競馬が開催されるはこびになった。出走馬は150頭、馬券売り上げも19万円余と人気も上々だった。市川競馬は春秋2期の開催で、第2回は昭和7年2月12日から3日間にわたり開催された。馬券売り上げも21万7千円と前回は上回る好成績だった」。また最終レースについては、「昭和14年9月28日から4日間、開かれ、ファンが前日から詰めかけたという」。

『市川まちかど博物館 続』（いちかわ・まち研究会 1999）p.81-82に「市川競馬場が大洲にあったころ」の項目があり、「昭和一三年一月開催された新春競馬では馬券売上八二万八千円余りと新記録を達成するが、おりしも戦時体制へと進む時代の中で、昭和一四年九月二八日から四日間の開催をもって市川競馬は幕を閉じることになった。」とある。

『地方競馬史 第1巻』（地方競馬全国協会 1972）を千葉県立中央図書館より取り寄せて提供。p.241「市川競馬場」には、昭和13年限りで廃止と記載があり、上記タウン誌とは廃止年に1年ずれがある。「市川競馬場年次成績」として昭和6年秋から昭和13年秋までの計15回の各開催の日数、出場馬数、有料入場者数、入場券発売高の記載があり、また白黒写真1枚が掲載されている。p.383-392の「〈座談会〉地方競馬むかしばなし」に、競馬場の敷地や厩舎などについての記載がある。

また、国立国会図書館のデジタルコレクションに次のような資料がある。

『競馬年鑑 昭和11年版』（競馬研究会 1936）に「昭和十年各地方競馬成績（抄録）」として「市川競馬」春・秋のレース結果や上位の馬の名前があり、「繫駕」「繫速」<sup>かけあし</sup>「駈歩」などレースの種類も記載されている。

『地方競馬年鑑 昭和13年版』（帝国馬匹協会 1938）に「昭和十一年春季地方競馬成績」、「昭和十一年秋季地方競馬成績」があり、日数・登録馬数・入場馬数・有料入場者数・牧入・支出等が記載されている。また、「地方競馬主催者、競馬場所在地、施行許可年月日及最初ノ開

催年月日」が記載されており、市川競馬場の所在地が「東葛飾郡行徳町」、施行許可年月日が「(昭和)6年11月5日」、最初の開催年月日が「(昭和)6年12月18日より3日間」と記載がある。なお、当時の大洲は行徳町に含まれていた。

- 910.26 石原慎太郎著『やや暴力的に』の中の短編「隔絶」に、太平洋沖を2日間漂流し生還した男性の心情が描写されている。また、同じ著者の『老いてこそ生き甲斐』には、その「隔絶」についても触れられている。実際にあった事件をモデルに「隔絶」を執筆したように推測できるが、そのモデルとなった事件の内容がわかる文献を教えてください。

『やや暴力的に』(石原慎太郎／著 文藝春秋 2014) p.111-123に掲載の「隔絶」に、主人公が「たった一人でこの世の中から隔絶された」2回の経験として、1回目「小笠原の母島」、2回目「伊豆諸島の鵜渡根島(うどねじま)」のことが書かれている。また『老いてこそ生き甲斐』(石原慎太郎／著 幻冬舎 2020) p.10-11に「伊豆諸島の中の鵜渡根島で潜っていて船からはぐれ、(中略)奇跡的に助かった男の話を、『隔絶』という題名で発表した(後略)」と記載されている。

石原慎太郎と曾野綾子の対談集『死という最後の未来』(石原慎太郎・曾野綾子／著 幻冬舎 2020) p.19の石原氏の話の中に、「そこで『隔絶』という短編を必死で書き上げたんです。伊豆諸島沖の鵜渡根島の近くでダイビングしていた男が、銚子沖まで3日3晩、漂流したという実際にあった話を思い出した。(中略)救助されるまで彼が何を感じていたのか。それを想像して書こうと思ったんです。」という記述がある。

朝日新聞記事データベースで検索したところ、昭和58(1983)年7月18日の朝日新聞朝刊23面に、「伊豆七島・新島沖で十五日昼前、スキューバダイビング中に行方不明になった東京都内の三十二歳の男性が、二昼夜も漂流したあげく、十七日夕、五十五時間余ぶりに約二百三十キロも離れた千葉県銚子市の犬吠埼沖で漁船に救助された。」との記載があった(新島沖は鵜渡根島から約五百メートル北西の沖合、との説明あり)。また、読売新聞及び毎日新聞の同日の朝刊にも同様の記事があった。漂流日数が1日異なるが、「伊豆諸島沖の鵜渡根島」の部分を実際にあった事件をモデルにしていると思われる。

- 911.35 藤沢周平著『一茶』(文藝春秋 2009)には、小林一茶は、亡父の遺言によって、実家の田畑・家屋等の半分を遺産相続したとある。この遺産は、一茶の死後誰が相続したのか知りたい。

『一茶大事典』(矢羽勝幸／著 大修館書店 1993) p.77に「(一茶は)文政10年11月19日、焼け残りの土蔵の中で後妻ヤヲに看とられて65歳の生涯を終えた」とある。

また、『小林一茶』(小林計一郎／著 吉川弘文館 1986) p.239に「一茶が死んだ時、妻やをば妊娠中であった。翌文政11年4月、やたが生まれ、この人が一茶の血統を伝えるただ一人の子供になった」とあり、同書 p.240-241には、「やたが一茶の家をつぐことになり、のち越後高田の農業丸山仙次郎の八男宇吉(文政2年11月8日生)という人をむこに迎え、宇吉は弥五兵衛と改名して一茶家をついだ。やたと弥五兵衛の持高は、ずっと二石二斗六升六合で増減がない。しかし一茶は、やをにあまり金を残しておかなかつたらしく、やたはあまり豊かではなかった」という記述があった。

- 921 次の五言絶句の詩題と作者を知りたい。

「水抱孤村遠 山通一径斜 不知深樹裏 還住幾人家」

漢詩に関連する所蔵資料の詩句索引などでは確認することができなかつたため、インターネット検索を行ったところ、書道作品として同漢詩のものがいくつかあり、作品には作者、題は入っていないが、「劉球詩」「山居」といった記録が見られた。

国立国会図書館デジタルコレクションで、「劉球」「山居」をキーワードに検索したところ『漢詩大講座 第8巻』(国分青厓／監修 アトリエ社 1936) p.62に記載あり。

題名が「山居」、作者が「劉球」。

劉球は『中国人名事典』(日外アソシエーツ 1993) p.672に、「明代の学者。字は求楽、廷楽。安福(江西省)出身。(以下略)」と記載がある。